

AI生成コンテンツとSEOについての Google 公式見解

AIで書いた記事は
SEOで順位が下がる？

下がりにません。
重要なのは、AIか人間かではなく、
「内容が役立つかどうか」です。



Google 公式のポイント解説

01 AI生成＝スパムではない

★ Googleは、機械翻訳やFAQ生成など、以前からAI由来コンテンツを検索結果に採用。
★ 問題視されるのは「検索エンジンのためだけに作った低品質コンテンツ」のみ。

根拠 Google Search Central公式ブログ(2023年2月8日)
Danny Sullivan (Google検索リエゾン) の公式発言 (X)

02 「Helpful (役に立つ)」が評価基準

GoogleのHelpful Contentシステムは「読者の役に立つか」で評価。
人でもAIでも、読者に役立つコンテンツなら高評価を受けます。

根拠 Google for Developers公式ガイド

03 AIコンテンツでもE-E-A-Tを明確に

AIコンテンツを評価されるには、以下のポイントを明示することが重要。

- ★ Who (誰が作成したか) **: 著者や監修者を明記
- ★ How (どう作成したか) **: 生成プロセスやツールを公開
- ★ Why (なぜ作成したか) **: 目的や意図を明確に

根拠 Google公式ガイド「Creating helpful, reliable, people-first content」(2024年2月更新)

04 AI要約 (AI Overviews) の時代でもSEOは重要

- ★ AIが要約を表示しても、引用元ページに選ばれることで、むしろトラフィック増のチャンス。
- ★ 独自データや専門家の監修を含む記事は、AI要約に引用されやすくなります。

根拠 John Mueller (Google) インタビュー記事 (Search Engine Journal, 2025年1月)

こんな記事はペナルティの対象！

- ★ キーワードの羅列だけを自動生成した記事
- ★ 医療や金融など高リスク分野での誤情報発信
- ★ 隠しテキストやリダイレクトスパムによる検索エンジンの騙し行為

☒ スпамポリシー違反として、手動でペナルティを受ける可能性あり。

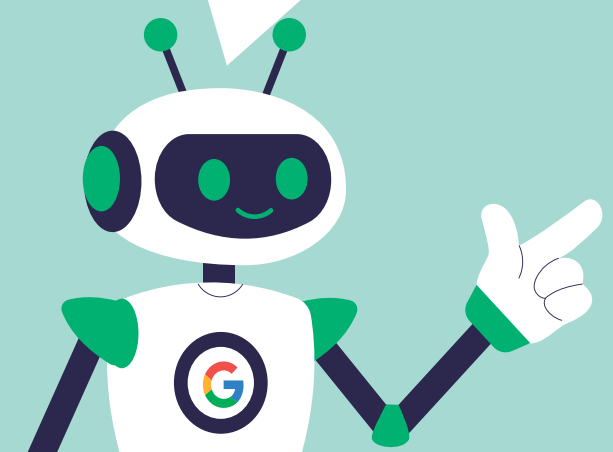
安全にSEOを成功させる具体的な運用アドバイス

- ★ AIで作成した下書きを人間がファクトチェック・監修
- ★ schema.orgを活用して著者情報を構造化データで明記
- ★ 記事の末尾に生成方法や使用ツールを公開
- ★ AI検出ツールで低品質コンテンツを定期的にチェック
- ★ Google公式の「Helpful Contentチェックリスト」を導入

結論

GoogleはAIが書いたかどうかで判断しません。

「本当に役に立つか」「読者ファーストか」を徹底することで、AIコンテンツでも十分にSEOで成功できます。



Googleの公式メッセージはシンプル: **「品質がすべて」**です。